

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』 の精神分析的考察

—グループ心性とコンテナの機能—

木 部 則 雄

1. はじめに

村上春樹作『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（2013）に関して、ポスト・クライニアンの代表的な精神分析家であるビオン（W.R.Bion）とメルツァー（D.Meltzer）の理論を中心に精神分析的な観点から考察した。ビオンとメルツァーはクライン（M.Klein）の精神分析の適応を、グループ、精神病、自閉症などに広げた。本論文ではビオンのグループ心性、コンテナ / コンテインド、変形概念、メルツァーの思春期グループ、心的次元論の概念を用いて、本小説を精神分析的に解説する。

本小説は主人公である36歳の多崎つくるとの回想から幕が開く。つくるとは大学2年の7月から翌年の1月まで死の淵を彷徨った。この契機は高校時代の親友4名にグループから追放されたことであった。グループのメンバーは名古屋市内の公立高校の同級生であり、高校1年の時のボランティア活動がきっかけとなり、その後、親密なグループが自発的に活動を続けた。他の4名は偶然にも姓に色が含まれ、男子は赤松（アカ）と青海（アオ）、女子は白根（シロ）と黒埜（クロ）であった。これはつくるとの妙なコンプレックスともなっていた。つくるとは自分だけがこれといった個性を持ち合わせていない人間であると感じていた。これらのエピソードは恋人、木元沙羅に語られた。つくるとはグループから追放された理由を知ることな

く、16年間の過ぎ去った。沙羅はそれを知らないままにいることは危険であり、つくるに真実を追求するように伝える。つくるは過去の出来事と対決することを決心する。

沙羅は4人の近況を調べ、つくるに伝えた。父親の法事で帰省したつくるは、まずアオに会いに行った。アオは当時のシロがつくるからレイプされたこと語ったことが原因であったとつくるに告げた。さらに、アオはシロが6年前に浜松で絞殺されて亡くなり、未だに犯人は逮捕されていないことを告げた。次に、つくるはアカに会いに行った。アカはシロが神経を病んでいたこと、そして密かにつくるを好きだったのかもしれないことを告げた。つくるはクロの住むフィンランドに行く決心をする。ところがヘルシンキに行く数日前、偶然に沙羅を見かけた。つくるは沙羅が50代前半と思われる紳士と手を繋いで歩いていく姿を見て、嫉妬を感じた。クロはシロがつくるにレイプされたと訴えた後、妊娠が判明したが結果的には流産をしたことを語った。クロの献身的な看護によって、シロの拒食症は何とか回復したが、ピアノを子どもに教える以外にすべてに関心を失ってしまったとのことであった。クロは妊娠中に、シロが亡くなったことを知り、自分の娘にシロの名前を、ユズと命名した。つくるはシロとクロの二人が登場する性夢を思い出し、自分の責任を感じる。シロを殺したのは自分ではないだろうかという思いを巡らす。つくるはクロと二人でアカもアオも変わりなく、昔と同じ純粹さを持って暮らしていることを語り合った。

つくるは東京に戻り、ある夢でうなされて覚醒し、早朝の4時に沙羅に電話して、愛の告白をする。つくるは沙羅に電話をするが、沙羅からのコールバックに応えることなく、明日にすべてを賭ける決心をする。

本小説のあらすじは、主人公多崎つくるを廻る思春期のグループの破綻、そのトラウマの克服、喪の作業と再生というものである。大筋は以上のようなものであるが、詳細は本小説に当たって欲しい。

2. 精神分析的考察

1) 巡礼の旅のはじまり

本小説は多崎つくる（作）と木元沙羅のデートのシーンから始まる。村上春樹の小説にはしばしば名前にその小説のテーマや鍵が含まれていることがある。例えば、『海辺のカフカ』の田村カフカ、ナカタ（中田）さんの姓を重ねて書くと、甲村になるということである（木部, 2004）。多崎つくるという名前は多くのポイントを作るということで、駅を作る人そのものであり、きわめて具象的である。父親の名前である多崎利男に関しても、本小説内に記載されている多くのポイントで利益を上げる男というのも具象的である。しかしながら、多崎には多くの陰しさとという意味もあることから考えれば、この姓は思春期から大人へのプロセスをも隠喩しているかもしれない。木元沙羅の沙羅は、釈迦がクシナガラで入滅した時に、その釈迦の周辺を囲んでいた木の名前であり、沙羅双樹として涅槃図にしばしば描かれている。沙羅はつくるに真実の探求を促し、つくるの未解決な外傷体験を葬り、その解決を促したことからすれば、この名前は適切な役割を表している。つまり、この小説のテーマはつくるが沙羅という協力者を得て、それまでに直面することのできなかった未解決な出来事の巡礼の旅に出かけるというものであろう。

しかし、このグループのメンバーが誰も16年の間、真実を明らかにしなかったことは不可思議なことである。つくるは沙羅への愛情のために真実を明らかにする決心をする。契機は異なっているものの、これは戯曲『オイディプス王』の幕開けと同じ設定である。つまり、テーバイの先王ライオスが亡くなった事実に17年間、目を背けていたエディプス、その一族、テーバイの市民は疫病によって真実を明らかにしなければならぬ状況に陥ったことに相似している。シュタイナー（Steiner, J., 1993）は「見てみぬ振りをする」という機制に関して論じている。ここには真実に対する尊敬と

恐怖によって、共謀と隠蔽が導かれることが記述されている。これは真実の倒錯であり、現実からの心的逃避、不安と罪悪感に対する防衛であることを論じている。つくと生き残った3名との会話からすれば、本当は誰もつくるがシロをレイプしたとは思っていなかったにも関わらず、シロの精神的混乱の中で真実を明らかにすることから目を背けたのである。これは各々のメンバーがこのシロの発言に恐怖だけでなく、罪悪感を抱いたために生じた事態だったのであろう。

2) 思春期のグループ

本小説の主題のひとつは仲良し高校生グループからつくるが追放されたことの原因とその顛末である。そのグループは男女5名からなり、元々ボランティア活動に端を発している。若者に限ったわけではないが、ボランティアといった援助行動、愛他主義は一見、健康な行為とされている。このグループはボランティアという領域を超えて、他の活動でも親密な関係を形成した。ここには一切の秘密もなく、男女関係も、諍いもない理想的なグループであった。つくるを除く4名はある意味、このグループの維持のために名古屋の大学に進学した。つくるが東京の工科大学に進学した後もグループは維持されたが、シロがつくるにレイプされたという発言によって、このグループは真実を追求することなく、つくるはグループから追放され、グループは崩壊した。

(1) グループ心性

ビオン (1961) はグループに関してまず、グループには作業達成のための作動グループ (Work Group) 心性とそれを阻止する基底的想定 (Basic Assumption Group) 心性があることを指摘した。作動グループとは、メンバーが協同して基本的作業に集中し、合理的、科学的方法を用い、作業に伴う困難という欲求不満に耐え、現実原則に従うことによって、グルー

プ全体、個人ともに発達するというものである。しかし、基底的思想という原始的な情緒衝動によって、作動グループの基本的作業は阻止され、回避されてしまう。この基底的思想は当初、混沌としたものであるが、それがグループ全体の共通の幻想から発していると仮定すると、まとまりのある心性となることを記している。また、フロイト（1921）は集団心性を個人心性に極めて酷似したものとして捉えた。それに従えば、作動グループ心性は意識的であり、基底的思想心性は無意識的なものである。ビオンはこの基底的思想グループを①依存基底的思想、②闘争・逃避基底的思想、③つがい基底的思想に分類した。依存基底的思想とは物質的、精神的な援助や保護のために依存しているリーダーのために集まったものである。闘争・逃避基底的思想とはグループの存続のために闘ったり、逃げたりするように振る舞うことを特徴とする。つがい基底的思想とはグループの存続と維持が魔術的な性的関係によって生まれてくると予期される救世主によって維持されるだろうという幻想に依拠している。

つくるを含むグループはボランティア、友情、勉学など作動グループとして機能したが、同時にこの優等生グループの維持のためには男女関係、つがい（ペア、カップル）になることが暗黙の了解としてタブーとなっていた。このように性を抑圧、否認したことによって、このグループにおいては無意識的につがい基底思想が活発に作動することになった。よって、このグループはつがい基底思想の特徴である幸福感、楽観、親しみ、穏やかで心地のよさという側面を有していた。つくるを除く4名も、本来名古屋という土地に残る必要はなく、特にアカとアオは名古屋以外の大学に行ける境遇にしながら、グループ存続のため名古屋に留まることを決めた。それもこのグループの心地よさに由来していたと考えられる。そして、つくるが東京の工科大学に進学したことから、このグループは破綻への一歩を踏み出してしまった。つくるが抜けたことによって現実的な作動グループ

プとしての機能がなくなり、グループ全体で否認されていた性欲は無意識の幻想でなく、一気に現実化して表現された。それはレイプという恐ろしい現実としてシロに襲い掛かり、さらに妊娠によって戦慄を伴った救世主が具現化した。つまり、救世主として人々が望んだイエス・キリストが処刑されたことと同じように、これは流産という悲惨な末路を辿った。

つがい基底的理想では、決して希望は現実化されてはならず、その途端にグループは崩壊の一途を辿ることになる。シロは、つくるにレイプされたことを他のメンバーに詳細に語り、他の3人を十分に納得させた。これは事実ではないが、無意識的にはユートピア的グループを崩壊させた犯人であったつくるがレイプの犯人とされたのは当然のことであり、その結果、闘争・逃避基底的理想が表面化することになった。

(2) コンテナ / コンテインド

このグループは〈共同体〉(p.21)であり、〈僕らの間に生じたケミストリー〉(p.21)であった。しかし、つくるは自分の姓に色がないことに違和感を抱え、いつか自分がグループから排除されるのではないかという危惧を感じていた。つくるはアオとの会話の中で自らを、〈空っぽの容器。無色の背景。これといった欠点もなく、とくに秀でたところもない。そういう存在がグループに必要なものかもしれない。〉(p.168)と語るが、アオは〈・・・、でもおまえがそこにいるだけで、おれたちはうまく自然におれたちでいられるようなところがあったんだ。おまえは多くをしゃべらなかつたが、地面にきちんと両足をつけて生きていたし、それがグループに静かな安定感みたいなものを与えていた。・・・〉(p.168)と反論する。クロとの会話でも、〈・・・僕はいつも自分を空っぽの容器みたいに感じてきた。・・・〉(p.322)と評しているが本項ではつくるが自ら語る容器とはどのようなものであるかを考察する。

ビオン(1962)は早期母子関係をコンテナ(容器)・コンテインド(中

身) モデルとしてコンテイメント (包容過程) を提唱した。この世に生を受けたばかりの乳児は空腹ですら死の恐怖と感じ、その恐怖を母親に投げ込む。母親はその恐怖のコンテナーとなって、乳児に空腹という名前を与え、授乳をし、恐怖を緩和する。ビオンはこの過程をコンテイメントと名称した。これは心的過程の起点であり、この過程に支障が起きると重篤な精神状態に陥る。デュビンスキー (2002) (Dubinsky,M.) は、コンテナーの機能を「感覚データ (感覚印象) + 情緒 ⇒ 象徴的思考」と定義し、発達障害や被虐待児の心的世界を精神分析的な見解から、コンテナーの欠損、障害の結果であるとしている。つまり、発達障害や被虐待児は、心的要素となる α 要素の生成に支障を来たしているために、①具象的思考、②万能感 (隠された無力感)、③受動的なスプリッティング、④「第二の皮膚」、⑤「分解」、⑥閉所 (侵入同一化) などの精神病状態に至ることを論じている。

フロイト (1940) は、思春期が潜伏期までの精神性的発達に続くものであり、そこでのテーマは幼児性欲を性器性欲に統合することであり、思春期が乳幼児期のやり直しであると示唆している。思春期が時に平穏でないのは、この乳幼児期のやり直しで大きな躓きを経験するからである。さらに、思春期はこどもから大人への過渡期であり、両親への依存から大人という自立した個人になるまでの時期である。多くの思春期の若者は両親への依存を嫌うが、かといって一人の個人として機能することはできずグループを形成する。しかし、思春期の若者は其々乳幼児期の未消化な葛藤を抱えているため、グループは不安定で流動的である。本小説のつくるを含めた5名も思春期になり、乳幼児期の葛藤の無意識的な再燃に苛まれながらも、それを乗り切るためにグループを形成した。ビオン (1970) はグループに関してもこのコンテナー / コンテインドを応用した。つくるが自認している通り、つくるがこのグループで担った無意識的役割は容器で

ある。ビオンはコンテイナーとグループの関係は、共生symbiotic、共在commensal、寄生parasiticのどれかに該当すると考えた。共生的な関係とは対決は起るが、その結果としてコンテイナーとメンバー双方は有益な発達を成し遂げることが出来る。共在的な関係では、コンテイナーとグループはお互いに影響することなく共在する。ここには対決も、変化もない。寄生的な関係では、羨望が優勢となり、コンテイナーとグループの双方にとって破壊と剥奪を生むことになる。さて、これを本小説のグループに当て嵌めて考察すれば、このグループは対決も変化もなく、コンテイナーと共在的な関係にあり、メンバー双方は決して発達することはない。つまりここでは変化は起こらず、新しい自己発達、自己発見もない。永劫回帰的に争いもなく、穏やかな平和な関係のみが存在する。この後、コンテイナーであったつくるは現実的に自らの発達、自立のために名古屋を離れ、コンテイナーと他のグループメンバー（コンテインド）はそれぞれを喪失した。これは自己の連続関係をバラバラにする壊滅的なものとして体験された。そして、グループ内では羨望が竜巻のように起こり、メンバーは寄生的関係に陥り、破局的変化に至ったと考えられる。

ブリトン（1992）（Britton,R.）はビオンのコンテイナー/コンテインドに関し、理想的コンテインメントという絶対的な適合が存在するとすれば、それはその後に迫害感が追従し、失敗することになることを論じている。さらに、コンテイナーとコンテインド間の相互の不適合、葛藤は必要なので、人生とはそうした摩擦を避けられないと記している。本小説のグループのメンバーは同じ社会階層の平和な家庭に育ち、ボランティア、勉学に勤しみ、一見すると過度に品行方正で、グループは理想的なものであったが、その後に迫害的なものとなったことは、ブリトンの記述に一致する。

（3）多崎つくるのこころの発達

多崎つくるは手広く不動産業を営む父親、やや過保護な母親、優しい二

人の姉のいる家庭に育った。父親は多忙で、ほとんど自宅で過ごすことなく、つくるは女性に囲まれてすくすく育った。父親は初めての男の子の名前として「つくる」を決めたが、その漢字、「創」あるいは「作」のどちらかにしようかと悩んだ。その結果、父親は「創」にすると負担になり過ぎ、人生の目的は単純な方が生きやすいという理由で「作」を選択した。父親は息子に創造的な人、クリエイティブになって欲しいという期待を抱くことはなかった。また、つくるに家業を継ぐように強要するわけでもなく、父親は会社を娘婿に譲ってしまった。＜物心ついて以来、父親と親しく関わった記憶がつくるにはほとんどないのだが・・・＞（p.60）とつくるが回想しているように、つくるにとって父親はエディプス・コンプレックスのテーマとなるような権威的でも、影響の強い人物でもなかった。小説の後半で、つくるは父親の形見の時計を見ながら、＜以前より頻繁に時刻を確かめるようにもなった。そしてそのたびに父親の影が微かに彼の脳裏をよぎった。＞（p.359）と感じる程度の人であった。つくるの父子関係にはエディプス葛藤に伴う去勢不安、エディプス葛藤は認められない。つくるは人生の単純な目標に従って素直な青年として成長したのであろう。つくるは実質的に母親、二人の姉に育てられたことによって、グループ内でピオンの記号では♀と記されるコンテナの役割を果たしたのであろう。一方、つくるはグループに対する未練もなく、幼い頃から関心があった駅を作ることを学ぶために、ひとり東京の大学に進学した。コンテナそのものであったつくるに情緒は存在しなかったのであろう。また、つくるが悩んでいた自らの存在のなさ、情緒体験の乏しさに起因するものであり、それはつくるが一見すると物心ともに恵まれた家庭に育ち、情緒的葛藤に巻き込まれたことがなく、情緒発達の必要性もなかったためであらう。

つくるはグループから排除された真相を明らかにすることなく、その後

の5ヶ月間、<つくるは死の入り口に生きていた。底なしの暗い穴の淵にささやかな居場所をこしらえて。そこで一人きりの生活を送った。> (p.40) と瀕死状態であった。つくるにとって、<ケミストリー> (p.51)、化学反応によって生成された<完璧な共同体> (p.51) を失うことは自分自身の一部を失う情緒体験も感じないほどの喪失体験となり、死に直面する状況に至った。ウィニコット (1965) は重篤な鬱病として、自他未分化な状態での喪失体験は自分自身の一部が失われたかのように感じ生命の危機にも迫る原初的鬱病と記述している。つくるの5ヶ月間は正しくこうした体験であったに違いない。その後、つくるはクロとシロと性交をしている夢を見るが、この時に心あるいは身体のどちらかのみしか選択できないと伝えられ、嫉妬を感じて生きる決心をした。メルツァーは子どもとの精神分析療法のプロセスを『精神分析過程』(1967) に記した。子どもは過大な投影同一化によって自我境界を破壊し、自他分離のない世界を形成するが、精神分析療法においては面接の休みによって母親転移下にある分析家を自分とは分離した存在と見なさなければならない。この際、子どもは分離に対して怒りと嫉妬を感じ、分析家を眼差しや乳房のある上半身と臀部や陰部などの下半身に水平にスプリットすることを論じているが、これは性欲と愛情が統合される以前の段階である。クロとシロとの性交の夢は、つくるもようやく性欲、愛情をそれぞれ別個のものとしてであるが、感じるようになるようになったことを示している。続いて、つくるは灰田という大学の後輩と知り合う。灰色は当然、シロとクロが混じりあった色であり、性欲と愛情の合体を示している。しかし、これは同性愛であり、夢が幻の状態での灰田との関係につくるは狼狽している。思春期における同性愛に関してメルツァー (2011) は保護者からの分離に伴い思春期の若者は相互に投影同一化をするために、そこには時に同性愛傾向が生じることを論じているが、つくるは嫉妬を感じるようになり、思春期のメンタリティに一

歩足を踏み入れたことが出来たと考えられる。その後のつくるの性的関係は、激しい愛情を伴うことなく、淡々とした情緒関係に裏打ちされたものであった。つくるは、沙羅からの本当に人を好きになったことがあるのかという問いに、そんな経験がないと答えている。フロイト（1905）は精神-性的発達理論で最終的に性器と性器だけの結合だけでなく、相手の全人格を相互に認め合う全体的対象愛の段階を性器統裁と論じたが、つくるにはフロイトの語る性器統裁の経験はなく、性欲と愛情は近づきつつあるものの依然として分離した状態であった。つくるにとっての沙羅との出会いは、性欲と愛情の統合という人生の最大のクライマックスであった。

次に、つくるのパーソナリティの発達に関して、メルツァー（1975）が自閉症の研究からこころの発達に関して論じた心的次元論を参照して考察する。メルツァーは、自閉症児が刺激物に一直線に邁進する直線の対象関係を一次元性、病的に記憶したり真似をしたりする平面的対象関係を二次元性と考えた。さらに、無意識的空想が外界に投影同一化されたものの、その恐怖が緩和されずに自らを襲うといった精神病状態を三次元性、投影同一化／摂取性同一化が円滑にコミュニケーションする健康な状態を四次元性と考えた。つくるの最大の関心事であった駅を作るという仕事は、独創性を必要とする建築家の仕事とは異なり、列車と人の流れをとという機能を優先的枠組みとして設計するものである。また、駅の構造は平面を何層かに重ねた立体構造であり、二次元から三次元の間に存在している。二次元の世界とは平面であり、人の行動を模倣し知識を優先させて、情緒的体験なしに生きる世界である。次に、三次元性の世界では空間はできるが時間性がなく、そこには一方的な出入りしかない。つくるのこころはこの世界に留まっており、他のメンバーの入り口としての容器を提供しただけで、そのために自らを空っぽの容器と感じたのであろう。情緒体験は三次元性のこころ、心的空間が形成されており、投影性同一化／摂取性同一化

が行われるような時間性が加わって、初めて可能になる。沙羅との関係においても、当初、沙羅の容貌や服装といった表面的な事象への関心が高いが、最終的に沙羅の気持ち、こころの中へと関心を高め、夜中の電話ですら我慢できなくなる。これはつくるのこころの変化が二次元から四次元へと発達したことを意味している。これがつくるのこころの発達、すなわち次元性の展開と考えることができるであろう。

つくるは沙羅と会う前に夢を見る。つくるはピアノを弾き、黒い服を着た女性が分厚い譜面を完璧に捲る。しかし、50名ほどの聴衆はそれに飽きて、ピアノの音が聞こえないほどの騒音を立てる。つくるがふと、その女性の手を見ると6本の指があったことに気づき目が覚める。つくるは沙羅によって、リストの『冬の巡礼』を弾いていたが、50代の男性はそれに辟易として、軽蔑したかのような騒音を立てたということであろう。沙羅の指が6本であったのは、5人グループに沙羅は参加していたということであろう。しかし、すでにシロは亡くなり、今は5人である。駅長の語る困った忘れ物である指、緑川の指が入っていると思われる布袋、また、リストの6本指の伝説がある。この小説の登場人物に関連するメタファーではないかと考えられる。

(4) シロの精神病理

シロは産婦人科医の娘として養育されたが、父親の墮胎という仕事に大きな罪悪感を抱き、苦慮していた。思春期のグループはシロの苦慮をコンテインし、シロはこの罪悪感をリストの『冬の巡礼』の「レ・マル・デュ・ペイ」（郷愁）と奏奏することで癒し、自分の死に場所を求める気持ちを音楽で象徴的に昇華していた。また、メルツァーとハリス(Meltzer,D.&Harris,M. 2011)は思春期グループの特徴として、マインドレスを挙げているが、シロは思考することなく、コンテイナーに包容されていた。特にシロはクロが比喩しているように「白雪姫」、クロは「七人の小人」であり、自主性

や能動性が乏しく、思考する必要のないメンバーだったのであろう。そのため、つくるの上京は特にシロにとって大きな喪失体験となった。シロはつくるというコンテナの喪失における喪の作業を行うことができず、その現実から必死の逃走を試みた。スピッツ (Spitz,R.A. 1945) によれば、乳児院に入所した依託性鬱病の乳児は発達初期の思考作用、意識、注意、判断と結合したすべての自我機能からも意図的に逃れようとして死に至ることがあると述べているが、つくるを失ったシロはこれに通じるところがある。コンテナを失ったシロのパーソナリティはばらばらになって、生气と意味が失われたのであろう。

ビオン (1957) はパーソナリティに関して、すべての人のここには精神病的パーソナリティと非精神病的パーソナリティの双方が存在しているとした。精神病的パーソナリティとは、些細な欲求不満にすら耐えることができず、考えることや衝動のコントロールが不能で、著しい破壊衝動と相俟って、内的、外的現実に対する暴力的な憎悪となって表現される。これは外的にはサディズム、内的には絶滅恐怖を孕むことになる。シロは父親の仕事に激しい憎悪を抱き、内的には過酷な罪悪感を抱いていたが、これは精神病パーソナリティそのものである。つくるというコンテナの喪失で、これが一気に露呈し、発病に至ったのであろう。ここでは、 β 要素から α 要素への変換が成されず、 β 要素膜という意識と無意識、睡眠と覚醒、真実と虚偽の区別つかない心的状態が作り出される。つくるにレイプされたというシロの語りはこうした状態でなされ、シロの心的現実の中でつくるは犯人とされたのであろう。さらに、この憎悪と罪悪感は胎児に向かい、胎児が流産の憂き目に至ったことは必然的なことであった。

その後、シロは重度の拒食症を発症し、クロの必死の看病で生き延びた。シロはすでに発達初期のすべて自我機能そのものを失い、 β 要素膜という精神病の世界の中に生きることになった。シロにはすべての外的現実から

自分に降りかかるものは、レイプ時の出来事、食物は精液とも同一視されるかのような地理的混乱（メルツァー、1975）に至り、発症したのであろう。ビオンによると、作動グループと結合していない残りの二つは精神と身体に分化していないプロトメンタル・システムを構成し、これがグループの特有の感情やエネルギーを作り出す。この仮説によって、ビオンは心身症や感染症などを論じている。つくるのグループはつがい基底の想定が基本であり、依存基底の想定、闘争・逃避基底の想定がプロトメンタル・システムを構成していた。シロはグループの喪失によって、このプロトメンタル・システムが顕在化し、つくるを犯人としてグループの敵とみなしてグループから追放する。しかし、その後、すべての外的現実から逃避し、さらに生命の維持に必要な食物からも、生命からも逃避しようと試みた。重篤な拒食症の患者に心理的なアプローチは無効なことが多いのは、こうした精神と身体が分化していない状態であるためである。クロの献身的な看病はシロの依存感情を引き起こすことを可能にした。ここに依存基底想定が発動という展開になったのであろう。クロがシロの母親として依存感情を引き受け、母親のようにシロを赤ん坊のように育てなおすことで、シロは改善傾向に至ったのであろう。

クロはシロに対して、〈あの子には悪霊がとりついてた〉（p.304）、〈そいつはつかず離れずユズの背後にいて、その首筋に冷たい息を吐きかけながら、じわじわとあの子を追い詰めていった。・・・〉（p.301）と語る。シロの悪霊とは如何なる存在であったのであろうか。シロはコンテナを失い、精神病パーソナリティに侵された。フロイト（1920）は人の存在を生の本能（エロス）と死の本能（タナトス）とのせめぎ合いであると考え、本能二元論を提唱した。死の本能は一般的には生の本能と融合し、その実態は間接的にしか垣間見ることができないとした。クライン（1932）は乳幼児の精神分析から早期超自我を発見し、この破壊性、衝動性は死の

本能に直接的に由来しているとして、フロイトの理論を発展させた。死の本能を包容するコンテイナーが喪失したために、シロの本能が身体外に存在するようになったことを、クロは敏感に察知していたのであろう。シロは最後に謎の死を遂げるが、これはシロが死の本能に触まれた結果と考えることができるかも知れない。

ちなみに、灰田の父親が語ったジャズピアニスト緑川の死のトークンの語りも、コンテイナーを喪失した死の本能の外在化を意味し、コンテイナーの観点からするとシロの悪霊と同じことだと考えられる。緑川はこの死のトークンを譲り渡す方法として、＜簡単なことだ。相手が俺の話を理解し、受け入れ、事情をしっかりと納得して、その上でトークンを引き取ること
に合意してくれればいい。・・・＞（p.86）と語る。これはコンテイナー/コンテインドの関係であり、精神分析の専門家であればクライアントからの希死念慮を受け入れ、理解し、解釈するということになるであろう。

（5）巡礼の旅 —Oを廻って—

さて、つくるは沙羅の後押しで巡礼の旅に出かける決心をする。巡礼とは聖地、殉教者の足跡を廻るものである。本小説での聖地は名古屋であり、殉教者はグループの永続を願ったメンバー全員である。グループが崩壊したために大きなトラウマ、喪失体験に至った。巡礼の旅をするためには帰るべき駅のホームでなく家庭というホームが必要であるが、その役目を果たしたのが沙羅だったのであろう。つくるは沙羅から4名のメンバーの現状を聞き、シロの悲惨な末路という漠然とした事実だけを知らされる。巡礼の旅はつくるが過去の事実を知り、克服しようとする意図にその端を発している。ビオン（1965）は窮極的事実、絶対的事実を「O (origin)」という記号を用いて表した。つくるが目指したのはこの事実、Oであった。しかし、Oについて知ったり、伝えたりすることは可能であるが、Oそのものを知ることはできない。なぜなら、Oはあらゆるものの真性、ものそ

のものの自体であるからだ」とピオンは語る。Oは常に変形を受け、人はその変形されたものだけを知覚しうる。ピオンは風景の絵画を例にとり、風景というOは画家(T α)によって変形され最終産物(T β)となる。同じ風景を描いても、最終産物は画家によって異なるもの(変形物)となるが、不変のものもある。この比喩を用いれば、つくるは自分自身のOを知るために旅に出て、キャンパスに絵を描き始めたと表現できる。起源となった事実Oはすべてのメンバーに降り懸かった災いであるが、つくと他のメンバーの絵には当然、変形した部分と不変な部分があった。ピオンはOの変形に関して、硬直性運動変形、投影性変形、幻覚心性変形の3タイプに分類できることを記述しているが、ここで其々のメンバーの変形を見ていきたい。

つくるは、まずアオと会い、事情を説明する。つくとアオの会話には「僕は昔からいつも自分を、色彩とか個性に欠けた空っぽな人間みたいに感じてきた。・・・空っぽであることが」・・・アオは「いや、おまえは空っぽなんかじゃないよ。・・・」>(p. 173)とある。アオはおそらく空っぽの容器の意味を理解していないが、これはアオが過去も、そして今も家庭という適切なコンテナを有しているからであろう。アオは「おまえに会えてよかった」、彼はつくるの目をのぞき込みながらそう言った。相手の目をまっすぐ見て話をし、力を込めて握手をする。昔から変わらない。>(p.175)と、アオの高校時代から変わらない気質が記してある。これは硬直性運動変形あり、過去と現在の関連が明確である。つまり、この変形はある感情や思考が過去のある領域から他の現在の領域へと至ったのかについて分かるかどうかということであり、これは神経症的パーソナリティに属することであり、精神分析における重要な転移もこの変形に含まれる。こうした観点から、アオが健全なパーソナリティの持ち主であることを示唆している。

次に、つくるはアカに会いに行く。アカは名古屋で『最も成功した三十代の独身男性』の一人であるとある女性誌に掲載されていた。しかし、そのビジネスの実態は自己啓発的なセミナーの主催であり、アオはそれに嫌悪感を抱いていた。アカは「クリエイティブ・ビジネスセミナー」の代表取締役となっていた。他のメンバーは皆、アカが父親のようにアカデミックな舞台で活躍するものと思っていた。しかし、アカは大学卒業後、大手銀行に入社し、3年後にサラ金会社に転職した。そこでは上司と意見が合わずに退職し、現在に至っている。アカはアオと異なり大きな変貌を成しており、つくるはアカの変貌ぶりにく「ただ不思議な気がするだけだよ。君がそんなビジネスを始めるなんて、十代の頃には想像がつかなかったものな」> (p.191) と語っている。また、つくるはアカの会社の設立の意味に、<「でもそこには社会に対する、君の個人的な復讐という意味合いもあるかもしれない。アウトキャスト的な傾向を帯びたエリートとして」> (p.192) と率直な感想を述べる。アカは父親のようなアカデミックな世界にも、一流の金融機関にも自分の居場所を見つけることができず、我慢できずにサラ金にまで身を落とすが、そこでも欲求不満に耐えることができずに、組織に属することから離脱した。アカの変化は高校時代からのアカからは想像するに難く、また、アカの社会への怒りは知性化されて真綿にくるまれているようであるが、激しい攻撃性が認められる。アカのプログラムは<「そしておれは自分が好きじゃないこと、やりたくないこと、してほしくないことを思いつく限りリストアップしてみた。そしてそのリストを基に、こうすれば上からの命令に従って系統的に動く人材を、効率よく育成できるプログラムを考案した」> (p.191) というものである。アカは意識的に感じないようにしているが、父親とのアカデミックな場での対決に敗北し、大手銀行という公の社会、さらにはサラ金という時にアウトロー的な組織にも居場所を見つけることができなかつた。この怒り、

攻撃性をアカはセミナー受講生、く上から命令を受けてその意のままに行動する層があり、その層が人口の大部分を占めている。全体の八十五パーセントとおれは概算している> (p188) に向けて、投げ込んでいる。これはアカが社会から敗北したことへの否認であり、投影同一化による徹底支配である。ビオンはこうした精神病的部分が優位な変形を投影性変形とした。その特徴は、自他の区別のできない混乱状態である。アカは無意識的な屈辱感を排泄するコンテナの役割を果たす受講生を必要とし、この情動は注目を確実にするために誇張され、コンテナはさらに暴力的な排泄によって反応する。アカの過剰な投影同一化はセミナー受講生と一体化することで感動、洗脳することを可能にする。アカはつくるにシロがつくるを好きだったのかも知れないこと、名古屋から外を出て行くだけの勇気をもてなかったことを語る。そして、アカは自分が女性に欲望を感じず、男性への欲望を口にする。アカはエディプスの敗者であり、アオのような家庭、女性というコンテナを見つけることができず、男性というコンテナに向かわざるを得なかったのであろう。このように考えてみると、アカは否認、投影同一化、誇張など精神病的パーソナリティが優位であることが示唆される。しかし、アカとの会話の最後に、く自分が相手に向かって「おまえ」と呼びかけていたことに、つくるはふと気づいた。> (p.206) とあるのは、つくるがアカに昔の不変物を発見したことを意味しているのであろう。

シロに関しては、つくるというコンテナの喪失に耐えることができず、幻覚心性における変形に至った。これは心的現実への憎悪、欲求不満への耐性の欠如、精神装置の排除、身体化などが挙げられるが、こうした機制は(4)で既に記述した。この変形は心的現実への憎しみを伴う人格の精神病部分による変形である。

つくるは最後に、フィンランドのクロに会いに行く。クロはグループの

破綻後に、拒食症になったシロを必死に看病した。その後、クロは陶芸の世界の出会い、そこでフィンランド人の陶芸家と知り合い、シロの看病を断念し、フィンランドに渡った。つくるはクロに会う前に、夫からクロの陶器の作品を見せてもらう。クロの作品はく全体的に肉厚で、縁が描くカーブも微妙に歪んでいたし、洗練されたシャープな美しさはうかがえない。しかし、彼女の作品には、見るものの心を不思議にはっとさせる温かな持ち味があった・・・> (p.276)、<色彩はごく淡く、寡黙に、しかし効果的に模様を背景を担っていた。> (p.277)と記述されているが、これは正しくグループでのつくるの属性そのものであり、クロはつくるというコンテナを喪失した後に、陶器という芸術作品で喪失したコンテナを造作していた。そして、暖かい家族という実質的なコンテナも形成することができた。つくるの突然の訪問に、クロは狼狽しながらも、つくるを確かめた。そして、クロは自分とシロの名前を昔の呼び名でなく、エリ、ユズと読んで欲しいことを伝える。これはクロとシロがペアであった過去との決別だけでなく、エリが一人の個人としてコンテナを獲得したことを意味するのであろう。エリはつくるへの昔の恋心を語り、それにユズが嫉妬したのかもしれないという仮説を語るが、ユズの発言とは了解可能な連結は見いだせなかった。二人は真実Oを知ろうと試みるが、納得した結論は見出すこと出来なかった。双方ともに、真っ向からこれを考えることはできなかったにしても、グループの破綻から16年、ユズの惨事から6年の歳月が経過していた。二人は早急に理由を求めることをせず、不確かさ、謎の中で時を過ごした。これはビオン（1965）の強調する負の能力であり、自分の無知、理解力のなさに気づくことができる力である。そして、二人はOを知ることを断念する。ビオンはOについて、Oを知るといった既述の3つの変形の他に、「Oになること」を語っている。ビオンは現実を定義することで現実を知ることはできないが、それでも現実が存在す

る (be)、在り続ける (been) ことはできるとし、このことを「Oになること」と考えた。Oになることは、自分自身をあるがままに受け入れ、その受け入れに抵抗した自分自身の事実に向けることである。これはOにおける変形であり、大きなリスクを伴うものである。Oにおける変化は破局的変化であり、それは暴力、体系の転覆、不変物という危険を孕むが、同時に成長を導く可能性もある。「ル・マル・デュ・ペイ」を聞きながら、エリはく「ねえ、つくる、あの子は本当にいろんなところに生き続けているのよ」> (p.307) と語り、ユズがピアノを弾く時の思い出がつくるの脳裏を占める。そして、二人は強く抱きしめ合う。16年間を飛び越えてくそれは過去と現在と、そしておそらくは未来がいくらか混じりあった時間だった。> (p.309) と書かれているように、二人は超越した時間軸の中に存在した。二人がOを知ることでなく、Oになることを選択した瞬間であったように思える。つくるはく「僕はこれまでずっと・・・僕は犠牲者であるだけじゃなく、それと同時に自分でも知らないうちにまわりの人々を傷つけてきたのかもしれない。そしてまた返す刀で僕自身を傷つけてきたのかもしれない」> (p.318) と過去の信念の体系を転覆し、さらにく「そして僕はユズを殺したのかもしれない」> (p.318) と暴力について語る。エリはく「ある意味においては、私もユズを殺した」>と語り、く「私たちはそれぞれに、そういう思いを背負っている」>と続ける。そして二人はアカのカソリック施設への寄付、アオの純粋な心という不変物について語り合う。ここでの二人の関係はビオンの語る共在的關係である。つまり、ふたつの対象が第三者を共有して、それが三者すべての益となるものである。二人は自らの真実を語り、それはユズへの大きな喪の作業となった。

3. おわりに

村上春樹の『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』をビオン、

メルツァーの精神分析理論を中心に論じた。つくるは目を背けていた事実から、沙羅との未来のために16年ぶりに直面した。つくるは情緒体験のない青年から、真実Oを追求する旅によって成長を成し遂げた。また、生き残ったメンバーはグループの喪失に対する喪の作業を行うこともでき、巡礼の大きな成果であった。

なお、本論文を書くにあたり、ビオンの解説書 (Grinberg, L.1977, Symington, J., Symington, N. 1996、ハシフ・メッド2003)、メルツァーの解説書 (Cassese, S.F.2002) を参考にした。

参考・引用文献

- Bion, W.R. (1957) : Differentiation of the Psychotic from the Non-psychotic Personalities. *Second Thought*. Karnac, London. (松木邦裕監訳：再考：精神病の精神分析論 金剛出版 2007)
- Bion, W.R. (1961) : *Experiences in Groups and Other Papers*. Basic Books, New York (池田敦好訳：集団療法の基礎 岩崎学術出版社 1973)
- Bion, W.R. (1962) : *Learning from Experience*. Karnac, London. (福本修訳：精神分析の方法 I 法政大学出版社 1999)
- Bion, W.R. (1967) : *Transformation*. Heinemann, London. (福本修、平井正三訳：精神分析の方法 II 法政大学出版社 2002)
- Bion, W.R. (1970) : *Attention and Interpretation*. Basic Books, New York.
- Briton, R. (1992) : Keeping Things in Mind. *Clinical Lectures on Klein and Bion*, Routledge, London. (小此木啓吾監訳：クラインとビオンの臨床講義 岩崎学術出版社 1999)
- Cassese, S.F. (2002) : *Introduction to the Work of Donald Meltzer*. Stylus Pub, London. (木部則雄他訳：入門メルツァーの精神分析論考—フロイト・クライン・ビオンの系譜 岩崎学術出版社 2005)
- Freud, S. (1905) : *Three Essays on the Theory of Sexuality*. SE VII. (懸田克躬・吉村博次訳：性欲論三篇 フロイト著作集5 人文書院)
- Freud, S. (1920) : *Beyond the Pleasure Principle*. SEX VIII. (小此木啓吾訳：快楽原則の彼岸 フロイト著作集6 人文書院)
- Freud, S. (1921) : *Group Psychology and the Analysis of the Ego*. SEX VIII (小此木啓吾訳：集団心理学と自我の分析 フロイト著作集6 人文書院)
- Freud, S. (1940) : *An Outline of Psycho-Analysis* SE XX III (小此木啓吾訳：精神分析学概論 フロイト著作集9 人文書院)
- Grinberg, L. eds (1977) : *Introduction of the Work of Bion*. Jason Aronson, New York. (高橋哲郎訳：ビオン入門 岩崎学術出版社 1982)

- ハシフ・メッド (2003) : ピオンへの道標. ナカニシヤ出版
- 木部則雄 (2006) : 精神分析的考察「海辺のカフカ」こどもの精神分析 岩崎学術出版社
- Klein,M. (1932) : *The Psycho-Analysis of Children*. Hogarth Press, London. (衣笠隆幸
訳 : 児童の精神分析 メラニー・クライン著作集2 誠信書房 1996)
- Meltzer,D. (1967) : *The Psycho-Analytical Process*. Heinemann, London. (松木邦裕監訳:
精神分析過程 金剛出版 2010)
- Meltzer,D. (1973) : *Sexual State of Mind*. Clunie Press, Perthshire. (古賀靖彦・松木邦裕
監訳 : こころの性愛状態 金剛出版 2012)
- Meltzer,D.eds (1975) : *Exploration in Autism*. Clunie Press, London.
- Meltzer,D.&Harris,M. (2011) : *Adolescence*. Karnac, London.
- 村上春樹 (2013) : 『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』 文芸春秋社
- 村上春樹 (2002) : 『海辺のカフカ (上) (下)』 新潮社
- Rustin,M., Rhode,M., Dubinsky,M., Dubinsky,A. (2002) : *Psychotic States in Children*.
Karnac, London
- Steiner,J. (1993) : *Psychic Retreats-Pathological Organization in Psychotic, Neurotic,
and Borderline Patients*.Karnac,London.(衣笠隆幸監訳:こころの退避—精神病・神経症・
境界例患者の病理的組織化 岩崎学術出版社 1997)
- Spitz,R.A. (1945) : *Hospitalism:An Inquiry into the Genesis of Psychiatric Conditions in
Early Childhood*.The Psychoanalytic Study of the Child 1:53-74.
- Symington,J., Symington,N. (1996) : *The Clinical Thinking of Wilfred Bion*. Routledge,
London. (森茂起訳:ピオン臨床入門 金剛出版社 2003)
- Winnicott,D.W. (1965) : *The Maturational Process and the Facilitating Environment*,
Hogarth Press, London. (牛島定信訳:情緒発達の精神分析理論-自我の芽ばえと母なる
もの- 岩崎学術出版社 1977)